

ART BRUT IN JAPAN / 2013

<http://www.no-ma.jp/>

 多様な主体との共働による
アール・ブリュット魅力発信事業
ART BRUT IN JAPAN



平成25年度 文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

多様な主体との共働による アール・ブリュット魅力発信事業報告書



Art Brut In Japan Document Book / 2013

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

多様な主体との共働による
アール・ブリュット魅力発信事業報告書
Art Brut In Japan Document Book / 2013

もくじ



Contents

| | |
|--|----|
| はじめに | 3 |
| 事業概要 | 4 |
| 事業Ⅰ 展覧会の開催 | |
| 展覧会1. 商業施設「大津バルコ」との共働 | 6 |
| 「アール・ブリュット ゾーン バルコ」展 | |
| 展覧会2. 全国規模ネットワーク「アメニティーフォーラム」との共働 | 12 |
| 「アール・ブリュット ランドスケープ -創造のカタチを一望する-」展 | |
| 展覧会3. 地域「近江八幡市重要伝統的建造物群保存地区一帯」との共働 | 18 |
| 「アール・ブリュット☆アート☆日本」展 | |
| 事業Ⅱ 公開研究会の実施 | 36 |
| 事業Ⅲ 情報発信 | 46 |
| まとめ | 48 |

はじめに



Introduction

近年、日本のアール・ブリュットは国内外で注目を集めるようになり、多くのメディアで「アール・ブリュット」が紹介される機会も増えている。特に美術関係者や福祉関係者などでは注目されている分野となっているが、その魅力をより広く、普段は芸術との接点が少ない方にも届けることを目的として「多様な主体との共働によるアール・ブリュット魅力発信事業」(以下、本事業)を実施した。

本事業にあたったのは、これまでも日本のアール・ブリュット作品の魅力を発信してきた、滋賀県内に拠点を置く7つの団体からなる実行委員会である。美術館、行政、観光物産協会、障害のある人の造形活動や日本のアール・ブリュットを支える団体で構成された。共働先など本事業に関わったのは、商業施設、全国規模のネットワーク、地域住民、ボランティアスタッフなどさまざま。また、国内外から招いた多彩なゲストによる講演会なども開催し、アール・ブリュットが持つ魅力や可能性を多面的な視点から考察することができた。本報告書はこの成果をまとめたものである。

以下、本報告書の概要を紹介する。事業の全体概要、事業Ⅰ展覧会開催、事業Ⅱ公開研究会実施、事業Ⅲ情報発信事業の大きく4つのパートからなる。事業Ⅰでは実施した3つの展覧会について、展覧会概要のほか、関係者へのインタビューや関連イベントレポートなどを掲載している。関連イベントレポートは、各講演会等の記録を実行委員がまとめたものである。事業Ⅱ公開研究会では各研究員により提案された、アール・ブリュットの魅力発信方法のアイデアなどをまとめている。事業Ⅲには情報発信の概要と、新聞記事などメディア一覧を掲載した。

最後に、本事業にさまざまな形でご協力くださった方々に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会

事業概要



Outline

【事業名】

多様な主体との共働によるアール・ブリュット魅力発信事業
(平成25年度 文化庁 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業)

【目的】

アール・ブリュットの魅力を、地域住民、美術関係者、文化行政関係者、商業・観光関係者など多様な主体との共働により、多くの人々に発信すること、また出会いの機会創出を目的として実施した事業である。加えて、事業に関わるさまざまな分野の団体・個人の関係性構築、美術館の新たな創造的機能の提示、地域の文化・観光資源の活用モデル提示を目指した。

【事業主体】

近江八幡市でさまざまな展覧会を開催してきたボーダレス・アートミュージアムNO-MA(以下、NO-MA)をはじめ、福祉施設における造形活動を支える団体、行政、アール・ブリュットを支える全国ネットワークなど多様な主体からなる実行委員会が本事業の運営・実施にあたった。
名称:アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
構成団体:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA(社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団)、滋賀県、近江八幡市、一般社団法人近江八幡観光物産協会、NPO法人はれたりくもったり、アール・ブリュットネットワーク、滋賀県施設合同企画展実行委員会

【実施概要】

本事業では、(1)展覧会の開催、(2)研究会の実施、(3)情報発信を3つの柱とする以下の事業を行った。

●事業Ⅰ 展覧会の開催

NO-MAを中心に、多様な主体との共働によるアール・ブリュット展を滋賀県内各所で開催した。

1. 商業施設「大津バルコ」との共働 「アール・ブリュット ゾーン バルコ」展
2. 全国規模ネットワーク「アメニティーフォーラム」との共働
「アール・ブリュット ランドスケープ ー創造のカタチを一望するー」展
3. 地域「近江八幡市重要伝統的建造物群保存地区一帯」との共働
「アール・ブリュット☆アート☆日本」展

●事業Ⅱ 公開研究会の実施

編集者、教員、医療・福祉関係者、学芸員など7名の研究員で構成する研究会を実施。事業Ⅰにおける3展覧会のレビュー、創作現場の視察、アール・ブリュットの魅力発信手法に関する研究を行った。

●事業Ⅲ 情報発信

事業プロセスをさまざまなメディアで情報発信し、その成果や記録を報告書として公開した。

1. 広報活動による情報発信 「NEWS LETTER」の発行
2. インターネットによる情報提供 FacebookやNO-MAウェブサイトでの情報発信
3. 記録・アーカイブ 「多様な主体との共働によるアール・ブリュット魅力発信事業報告書」(本報告書)の作成

EXHIBITION
事業 I 展覧会

商業施設「大津パルコ」との共働
「アール・ブリュット ゾーン パルコ」展

■ ■ ■
Art Brut Zone PARCO

滋賀県内において高い情報発信力を持つ商業施設である大津パルコと連携して、アール・ブリュットの展示を行うことで、普段、アール・ブリュットになじみのない幅広い層の来場者とその魅力を発信・周知することを目的として開催した展覧会。

【実施概要】

□会期 2013年11月22日(金)～12月15日(日)

□会場 大津パルコ内の4箇所(正面円形広場、1階センターコート、3F東側エスカレーター横、5F東側エスカレーター横)

□出展作家 10名

戸來貴規、鮎万里絵、澤田真一、喜舎場盛也、水谷伸郎、古久保憲満、吉川秀昭、勝部翔太、山際正己、舩次崇(順不同)

□作品点数 180点

□体験企画

ZONE 1「探してみよう」古久保氏の作品の中に描かれた特定の人物や施設を探し出してもらう企画。

ZONE 2「名付けてみよう」澤田氏の作品にタイトルをつけてもらい応募してもらう企画。
優秀賞を選出し公表した。

ZONE 3「覗いてみよう」水谷氏の電車作品を大型虫眼鏡で覗く企画。

ZONE 4「読んでみよう」戸來氏の日記作品のデザイン化された文字を読んでもらう企画。

ZONE 5「作ってみよう」勝部氏の作品と同じ材料(アルタイ)をレストラン利用者に配布。
アルタイ人形を作ってもらい展示した。

□関連イベント

(1)オープニングイベント 2013年11月22日(金)15:00～16:00

出演:キダユカ(ラジオパーソナリティ)、井上多枝子(本展アートディレクター) 参加者数:7名

(2)パルコ館内ギャラリー・トーク! 全3回 2013年12月1日(日)、8日(日)、14日(土)いずれも13:30～14:30
案内:井上 多枝子(本展アートディレクター) 参加者数:計35名

(3)書籍販売 会期中、大津パルコ5階「紀伊國屋書店」にて、アール・ブリュット関連書籍を販売した。

□延べ観覧者数(推定) 24,895人

※展示会場3か所で作品を鑑賞した者の延べ数(パルコ来館者数と開催期間中に1日実施した観覧者数調査に基づく推定数)

【成果考察】

大津パルコという情報発信力が高く、生活の延長線上にある空間で多様な来場者に向けてアール・ブリュットの魅力を紹介した。観るだけでなく、よりその魅力に近づいてもらうために設置した5つの体験企画では、ZONE2「名付けてみよう」に133件の応募があったほか、「作ってみよう」でも多くのアルタイ人形が作られるなど多くの反応が得られた。課題としては、作品展示に特化した場所ではない会場での展示だったため、作業に想定外の時間を要したこと、オープニングイベントの集客数がのびなかったことが挙げられる。しかし、展覧会を知らずに訪れた家族連れなども立ち止まってじっくりと作品を鑑賞する姿が多くみられるなど、アール・ブリュットとの初めての出会いを創出できたと言える。推定で延べ2万5千人の観覧者数を得るなど多くの人に作品の魅力を届ける機会となった。



1階センターコート 手前から山際正己、澤田真一、古久保憲満の作品展示風景



作品に見入る来場者



喜舎場盛也の作品



澤田真一の作品



水谷伸郎の作品



3階エスカレーター横 鮎万里絵の作品展示風景



古久保憲満の作品



「読んでみよう」のコーナー 日記作品の文字を読み解く来場者



「名付けてみよう」のコーナー 作品のタイトルを考える来場者



「観てみよう」のコーナー 拡大鏡で作品を覗き込む来場者



「作ってみよう」のコーナー アルタイ人形をつくる来場者



来場者がつくったアルタイ人形も展示

INTERVIEW

共働パートナーインタビュー

商業施設×アール・ブリュット 共働の可能性

長谷川 順一 *Junichi Hasegawa*
株式会社パルコ 大津店 課長



滋賀県から発信したい

パルコは映画館や劇場などエンタテインメント事業担当の部署があり、以前からカルチャー発信において定評のある商業施設です。私はその「カルチャー」の部分をやりたいと入社し、大津店でもずっと何かやりたいと思っていました。大津に住んでいるので、公共の場にあるアール・ブリュット作品はよく目にしていて、作品のおもしろさに惹かれて今回の企画を考えました。

また、東京から持ってきた企画をやるのではなく、滋賀から全国に向けて発信したいと思っていたのも理由の一つです。県もアール・ブリュットに力を入れていますし、県庁の方に相談して事業団をご紹介いただきました。

作品を扱うことの難しさ

美術館ではなく、商業施設の中に作品を展示するにあたって、我々はアール・ブリュット作品に対する知識も少なく、その扱い方、どのように展示すれば多くの人の興味を引けるのか、具体的な中身を作り上げるのにかなりの時間

と頭を使いました。障害のある方の作品を扱うということに、どうしても商業施設としてはセンシティブになる部分もあります。お客様やさまざまな団体からのクレームがあっては、という不安です。しかし、実際に開催してみると、その心配は杞憂でしたし、私自身は最初からそのような不安はありませんでした。

いろんな人に

興味を持ってほしかった

実際に会期が始まって感じたのは、お子さんの反応が予想よりもよかったです。電車の「覗いてみよう」コーナーは、近づきすぎてレンズが取れたり。澤田さんの「名付けてみよう」はお子さんと一緒に大人も真剣に書いておられました。フードコートで配布した「アルタイ」も、料理を待つ間に作って欲しい、という思惑通りたくさん作っていただけました。展示の配置を館内の一カ所にまとめたかったのは、いろんな人に興味を持ってもらいたかったから。会場が一つだと観たいと思う人しか来ない。アール・ブリュットを知らない人にも広く観ていただきたかった。そのことは実現できたと思います。企画としては成功したと感じていますね。

店舗の反応

正直な意見としては、テナントの

多くは「アール・ブリュットを知らない」「なぜパルコでやるのか?」という反応でした。しかし、お客さまがじっくり作品を観ている姿を見て「すごいですね」という意見も出てきました。今回の展覧会は新店がオープンしたのと同じ時期の開催だったので、期間中の集客増が展覧会によるものかどうか明確に判断することはできません。しかし、お客さまの反応を見る限りでは先ほども言いましたが、成功だったと感じています。

滋賀から発信し続ける

個人的には今後も何か機会があればやっていきたいと思っています。今回は初めての開催でもあり、一つ一つが手作り感のある展覧会となりましたが、例えば今後はもう少しパッケージ化されたようなものを作ることができれば、他店でも開催できる可能性が出てくるのではないのでしょうか。また、事業団とのつながりができたことで今後の道が開けたことはメリットだと感じています。

はせがわ じゅんいち
株式会社パルコ 大津店 課長。京都府出身。パルコの文化関連事業に惹かれて入社。大津パルコでアルバイトスタッフとして勤務のち正社員に。名古屋、大分での勤務を経て、現在は再び大津店で催事や本展のような文化系イベントの企画を担当。

REVIEW

展覧会レビュー

公開研究会研究員によるKPT法を用いた展覧会レビュー*



アサダワタル *Wataru Asada*

日常編集家

今回の展覧会では禁止でしたが、写真を撮ることは参加の一方法として十分あり得ただろうと思います。商業施設で作品と出会ったときに「撮りたい」衝動が起こることは容易に想像でき、最近ではSNSなどで共有したいと思うのは自然なことでしょう。作家さんの権利など難しい課題もあるとは思いますが、検討の余地が十分にあると感じました。

竹内 厚 *Atsushi Takeuchi*

Re:S 編集者

商業施設での展覧会は、見やすさ重視か見ごたえ重視か、難しいところと思いますが、作家と作品の選ばれ方など、とてもバランスがよかったです。アール・ブリュットの力とも思いますが、見た目の奇抜さなどすごくインパクトがある一方、さらっと見ても奥行きのある作品が多く、作品性の豊かさという点でもすごいと感じました。

早川 弘志 *Hiroshi Hayakawa*

社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房 主任支援員

商業施設という足を止めてもらいにくい環境の中で、様々な体験を促す仕掛けが設けてあり、作品や作家さんの魅力を知っていただける展示になっていたと思います。展示を集約すると興味のある方だけが訪れることになりがちですが、分散した展示により、幅広い多くの方楽しんでいただけるように工夫されていると感じました。



*研究員および、KPT法については36・37ページをご参照ください。

近藤 隆二郎 *Ryujiro Kondo*

滋賀県立大学 教授

作品と商品が隣り合わせで、アール・ブリュットの作品を見た直後に大量生産の商品を見るという感覚が結構おもしろい———というか、刺激的に感じました。テナント店舗内でも展示できたらさらにおもしろいでしょう。また作品は、創造プロセスやどこから描き始めた(つくり始めた)か、見られる機会があるとよいように思いました。

鳥井 新平 *Shinpei Torii*

近江兄弟社小学校 教諭

作家の紹介はテキストだけでなく、顔写真や日常の1コマなどがあってもよいと感じました。また、視覚障害者への配慮も含め、さわられる作品など、視覚以外の感覚に訴えるものがあるとよいと思いました。商業施設で展示することの意味・効果をさらに一歩踏み込んで引き出すため、テナントとの共同企画などがあるとよかったと思います。

山口 真有香 *Mayuko Yamaguchi*

滋賀県立近代美術館 学芸員

普段から展示業務に携わっていますが、立体作品の固定やアクリルケースのサイズなど、展示が非常に適切でした。美術館などでは通常作品をひとつの場所に集中させて展示しますが、今回は商業施設の特徴を活かしてフロアをまたいで作品があちこちに展示されていて、探す楽しみが演出されていたのがよかったです。

EXHIBITION
展覧会概要

全国規模ネットワーク「アメニティーフォーラム」との共働
「アール・ブリュット ランドスケープ -創造のカタチを一望する-」

■ ■ ■
Art Brut Landscape

全国の福祉関係者が一堂に会する「アメニティーフォーラム」との共働による展覧会。同フォーラムの開催会場の一部に展示会場を設け、日本と台湾のアール・ブリュット作家の作品360点を展示。多くの福祉関係者にアール・ブリュットの魅力、創造活動の重要性を発信した。

【実施概要】

□会期 2014年2月7日(金)～2月9日(日)

□会場 大津プリンスホテルコンベンションホール淡海10

□出展作家 28名

梅木鉄平、江中裕子、緒方彩乃、勝部翔太、楠真一、古久保憲満、佐藤朱美、佐野奈津美、澤田真一、舩次崇、舩万里絵、戸倉清志、名倉要造、西田裕一、西之原清香、藤野友衣、堀井正明、松本寛庸、三上正泰、美濃部責夫、武蔵諒、椋本一輝、ワン・イェンチェン、ファン・チージェン、ワン・ヤオチャン、チョン・リン、チェン・リーフ、リン・イーリ(順不同)

□作品点数 360点

□関連イベント

2014年2月7日(金)15:15～19:00

(1)報告 「ヨーロッパ巡回展 Art Brut from Japan -日本のアール・ブリュットの海外での動向-」
小林瑞恵(社会福祉法人愛成会アートディレクター) 参加者数:70名

(2)記念講演 「Art Brut Japan 日本のアール・ブリュットがイギリスに与えた影響」
ケネス・アーノルド(ウェルカム・コレクション館長) 参加者数:110名

(3)告知 「NO-MA界隈での『アール・ブリュット☆アート☆日本』」
薬戸さゆみ(ボダレス・アートミュージアムNO-MA学芸員) 参加者数:75名

(4)報告 「造形活動に必要な支援とは？」
齋藤誠一(社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団企画事業部アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター 主任アドバイザー) 参加者数:80名

(5)講演 「アール・ブリュット 元年」
保坂健二郎(東京国立近代美術館主任研究員) 参加者数:90名

□観覧者数 1,806人

【成果考察】

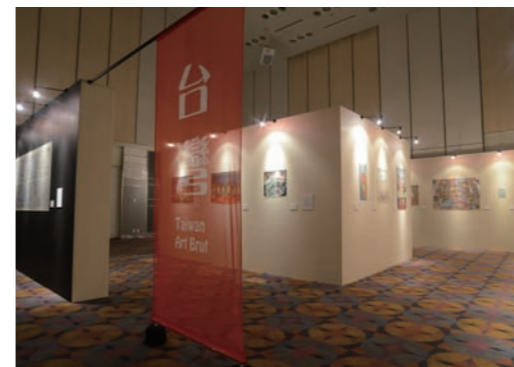
本展では「第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」出展の澤田真一氏の作品や、NO-MAが調査を実施した台湾の作品など28作家360点に及ぶ作品を展示、日本と台湾のアール・ブリュットの今を一望できる構成とした。「アメニティーフォーラム」に参加する福祉関係者には障害のある人の創造活動に関心の高い人も多い。そういった人々が会場を訪れ、感嘆の声を上げたり、係員に質問する姿が多く見られたことなどから、展示内容が充実していたと言える。関連イベントにも多くの来場者があり、作品の魅力とともに多くの情報を発信することができた。また、アメニティーフォーラム2014のプログラムで登壇された、青柳正規文化庁長官、村木厚子厚生労働省事務次官、嘉田由紀子滋賀県知事、障害者芸術文化振興議員連盟の方々も来場されるなど、今後のアール・ブリュット振興に関わりの深い方々にも作品の魅力に直接触れていただく機会となった。



会場全景



手前から 澤田真一、江中裕子、舩次崇の作品展示風景



台湾の作品展示風景



松本寛庸の作品展示風景



西之原清香の作品を中心に絵画や布作品の展示風景



古久保憲満の作品展示風景

REPORT

関連イベントレポート

記念講演

日時:2014.2.7 15:45-16:45
会場:大津プリンスホテル
ゲスト:ケネス・アーノルド

2013年3月28日から6月30日にウェルカム・コレクションで開催された『Souzou』展。ヨーロッパ巡回展の一つとして開催された同展には46名300点を超える日本のアール・ブリュット作品が展示され、3ヶ月間で約9万6000人が訪れた。本記念講演では同館の館長であるケネス・アーノルド氏に『Souzou』展のコンセプト、反響、インパクトなどを振り返りながら、アール・ブリュット作品を扱うことの難しさ、展望について語っていただいた。



Art Brut from Japan

日本のアール・ブリュットがイギリスに与えた影響

ケネス・アーノルド *Kenneth Arnold*

ウェルカム・コレクション館長。美術館業務と並行して、執筆活動や大学教諭として芸術と医学についての発信を行う。近著に『Cabinets for the Curious』(Ashgate/2006)。ウェルカム・コレクションはウェルカム財団が、医療と科学とアートの融合を目的として2007年に設立した美術館。



『Souzou』展はウェルカム・コレクションにとって初の大規模なアウトサイダー・アートの展覧会であったとことで、イギリス

では無名の日本人作家たちの作品を通して、イギリス人の知らない日本の新たな一面、文化を紹介する機会にもなり得たという。1日平均約1100名もの来場者が訪れ、メディア露出も多く、そのほとんどが好評価だった。この展覧会が与えたインパクトは3つ。1つは作品

自体の力強さ、2つ目は社会的な文脈に目を向けさせた点、最後はアウトサイダー・アートという複雑で困難なことに焦点あてたということ。これらは、アウトサイダー・アートの魅力と重なる。その魅力は力強さ、文化・社会・歴史に光を当てること、優れた作品・アートとは何か、なぜ我々は創造するのかという問題提起をしてくれる点にあるとケネス氏。『Souzou』展は、誰がアートをやっているのか、誰にどうやって、どのような文脈で作品を見せるべきかという非常に悩ましい問題提起をしている。そのような中で、見せることを前提とせずに生まれた作品の扱いは慎重にすべきであると考えていると述べた。



滋賀県におけるアール・ブリュットにまつわる動きにも言及。展示構成を考える際に「ボーダレス・アートミュージアムNO-MAの展示なども参考にしていること、「滋賀県におけるさまざまな先駆的な努力」について非常に興味深く考えていることなどが話された。

REPORT

関連イベントレポート

講演

日時:2014.2.7 18:00-19:00

会場:大津プリンスホテル

ゲスト:保坂健二郎

日本、ヨーロッパ、アメリカなど近年アール・ブリュットが紹介される機会が国内外で急増している。本講演では、現代美術を専門としながら、アール・ブリュットについても研究を続ける保坂健二郎氏に海外・国内における多数の事例紹介とともにその重要性を語っていただいた。また、福祉とアール・ブリュットの関係や、今後どのようなサポートが必要とされるのか、推進することによる可能性などにも言及。アール・ブリュットの更なる飛躍にむけた示唆に富む講演となった。



アール・ブリュット元年

保坂健二郎 Kenjiro Hosaka

東京国立近代美術館主任研究員。企画した主な展覧会に「フランシス・ベーコン展」(2013年)など。現代美術を専門とする一方でアール・ブリュットも研究テーマの一つに掲げる。近著に「アール・ブリュット アート 日本」平凡社、(企画:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、監修:保坂健二郎/2013)。



なぜ今『アール・ブリュット元年』なのか。その理由に「国内、海外問わずアール・ブリュットを紹介する機会が非常に増えている」ことを挙げ、海外における近年の事例紹介、国内の法律や福祉との関わりなどに言及。アール・ブリュットの現在と、可能性、展望が語られた。

欧米における重要な美術館、フィラデルフィア美術館や、リール・メトロポール現代美術館にアール・ブリュット作品のコレクションが寄贈され、館の方向性や軸となる分野に変化がもたらされているという。

また、最も注目すべきはやはり澤田真一氏の第55回ヴェネチア・ビエンナーレ入選であり、他にも多くのアール・ブリュット作品が選出された同展の成果を受けて、2014年には世界各地でアール・ブリュットに関する重要なシンポジウムの開催が決まった。

一方、日本におけるさまざまな動きについては、「障害者福祉とアール・ブリュット」の関係性を軸に持論を展開。2013年度以降の厚労省や文化庁など国が積極的に支援・助成する動きとともに、国とNO-MAを始めとする日本全国のアール・ブリュット関連美術館との連携の重要性にも触れた。

保坂氏は「障害者芸術」ではなく「アール・ブリュット」を推進すべきと考える理由について、この概念があるからこそ高齢者の創造的行為の受け皿になりうることや、美術館のパブリックアクセス化に寄与する可能性へ期待していることなどを挙げた。



REVIEW

展覧会レビュー

公開研究会研究員によるKPT法を用いた展覧会レビュー



竹内 厚 Atsushi Takeuchi

Re:S 編集者

3日間だけというのが惜しいほど、全体構成、個々の作品展示手法など、非常に充実したよい展覧会でした。黒一色を使った空間構成は、過剰にドラマチックに演出されるような印象もあり、よしあしの難しいところ。また、作品タイトルは一律に決めなければいけないのか、いわゆる展覧会の様式にそこまで寄り添う必要もないように感じました。

早川弘志 Hiroshi Hayakawa

社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房 主任支援員

前回展覧会もそうだったのですが、小さな作品用の虫メガネや、台湾コーナーでの映像による作家紹介など、初めての方でも楽しめるような展示になっていました。椋本さんの作品でタブレットによる展示も行われていて結構見入ってしまったのですが、実物の展示もあって量感などを感じられてもよかったかなと思います。

末安民生 Tamio Sueyasu

日本精神科看護技術協会 会長

例年の2倍の規模になって、ゆったりと観ることができ、振り返って作品を見ることができたことはこれまでより格段によかったと思います。さらに欲を言えば、混雑のことを考えると実際は難しいかもしれませんが、会場を見渡せる場所に椅子などがあって複数の作家の作品を対比的に観ることができたらいいだろうなと思いました。

鳥井新平 Shinpei Torii

近江兄弟社小学校 教諭

自分の中の魂みたいなのが「うっ」と声を上げるほど素晴らしい展覧会でした。「ゆるぎない表現」「隠されている無数の可能性と力」、挨拶文の言葉も非常によかったです。今回の展覧会タイトルを象徴するような全体を俯瞰できる会場構成、しびれるほどの作品力、そして何より作品からあふれる幸せ感が十分に伝わってきました。

アサダワタル Wataru Asada

日常編集者

台湾作家の作品が固めて展示されていましたが、キャプションなどで明示しつつ、作品性という視点から日台の作家が混在していてもよかったのではないかと感じました。日本の作品に比べて台湾の作品が圧倒的に少なかったため、先述のようなボーダレスな展示のために、台湾の作品数を増やして、もう少し作品数のバランスをとってもよかったと思います。

近藤隆二郎 Ryujiro Kondo

滋賀県立大学 教授

前回展覧会でも、日記作品など群の中の数点からそれを推測させるような展示はありましたが、今回椋本さんの作品で、作品単体だけでなくタブレット端末で膨大な記録を見ることができ、いつまでも見ていたい衝動に駆られました。また、作品と向き合う手がかりとして、各作品が造形活動の成果なのか、それとも何かの記録なのか、日常的な行為の痕跡なのか、制作の背景を知りたいと思いました。

山口真有香 Mayuko Yamaguchi

滋賀県立近代美術館 学芸員

旧作や定番作品から新作までバラエティが豊かで、新たな作品との出会いがありました。エントランスのスクリーンや中央に吊り下げられた平面作品(西之原さん)など「見通す・見渡す」イメージの展示空間全体と、小さい作品を見るための虫メガネなどの展示方法が「アール・ブリュットランドスケープ」という展覧会のコンセプトとよくマッチしてしていました。



EXHIBITION
展覧会概要

地域「近江八幡市重要伝統的建造物群保存地区一帯」との共働
「アール・ブリュット☆アート☆日本」

■■■
no-r-malization: The Art Brut in Japan

古い町屋など地域の文化資源活用や、地域と連携を目指し、近江八幡市重要伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区)の全8会場を使った展覧会を開催。関連イベントとして多彩なゲストを国内外から招聘し講演会を実施した。

【実施概要】

□会期 2014年3月1日(土)～3月23日(日)

□会場

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、カネ吉別邸、旧吉田邸、奥村邸、まちや倶楽部、かわらミュージアム、旧八幡郵便局、尾賀商店

□出展作家 35名

日比野克彦、澤田真一、リン・ウェイシュアン、伊藤喜彦、今村花子、大江正章、小原久美子、金崎将司、鎌江一美、工藤みどり、河野咲子、古久保憲満、佐藤朱美、鮎万里絵、武友義樹、富塚純光、中田勝信、似里力、西澤彰、秦野良夫、藤野友衣、堀井正明、松本寛庸、三橋信勝、宮間英次郎、横山篤志、吉田格也、吉田真理子、渡辺孝雄、ワン・イェンチェン、ファン・チージェン、チョン・リン、チェン・リーフ、ワン・ヤオチャン、リン・イーリ(順不同)

□作品点数 1,077点

□関連イベント 会場はすべて酒遊館

(1) オープニングレセプション 2014年3月1日(土)13:00～15:30

- ・ゲストトーク「イメージの力」日比野克彦(アーティスト)
 - ・講演 I 「NO-MAとの連携展をとおして～日本のアール・ブリュットの魅力を語る～」サラ・ロンバルディ(アール・ブリュット・コレクション館長)
 - ・講演 II 「日本のアール・ブリュット」はたよしこ(NO-MAアートディレクター)
- 参加者数:96名

(2) 講演会 2014年3月8日(土)13:00～15:00

- ・講演 I 「ヨーロッパのアール・ブリュット」ローラン・ダンシャン(Raw Vison特別顧問)
 - ・講演 II 「新聞記者が見た<NO-MA>以後のアール・ブリュット」岸桂子(毎日新聞学芸部記者)
- 参加者数:52名

(3) 講演会 2014年3月15日(土)13:30～16:00

- ・「新しい美術館のかたち～アール・ブリュット作品を美術館があつかうこと～」
 - 講演 I マルティニス・リュザルディ(パリ市立アル・サン・ピエール美術館館長)
 - 講演 II 保坂健二郎(東京国立近代美術館主任研究員)
 - ・ゲストトーク「台湾の障害者芸術に関する活動について」ハン・ジョンツン(台湾前文部大臣)
 - ・ゲストトーク「滋賀の美について」嘉田由紀子(滋賀県知事)
- 参加者数:75名

□延べ観覧者数 11,162人

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA 2,008名、カネ吉別邸 1,202名、旧吉田邸 1,189名、奥村邸 1,567名、まちや倶楽部 1,465名、かわらミュージアム 1,606名、旧八幡郵便局 2,125名

※尾賀商店はカウント対象外

EXHIBITION
展覧会概要

【成果考察】

本事業における3つの展覧会の中で最大規模となった。美術館、町屋保存活動、町づくりなど普段は単体で活動しているさまざまな団体が共働する機会を創出することができた。観光物産協会の協力で「節句人形祭り」が本展覧会期と合わせて延長され、観光資源がアール・ブリュットの魅力発信を盛り上げてくれる状況も生まれた。地域における共働とともに特筆すべきは、ボランティアスタッフの活躍である。61名が各会場の運営などを担う中で、多様な年齢、立場のスタッフ同士で交流が生まれたことは大きな成果の一つと言える。



展示会場① NO-MA

昭和初期の町屋を、和室や蔵などを生かして改築し、2004年に開館したミュージアム。



展示会場④ 旧吉田邸

多賀町に残る築100年の町屋。



ライブ러리・インフォメーション④
旧八幡郵便局

ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計による旧郵便局舎。



展示会場② 奥村邸

元呉服屋。江戸後期の建物と推定されている。



展示会場⑤ カネ吉別邸

築約100年、為心町通りにある元木材商の建物。



映像コーナー⑧ 尾賀商店

築150年の古民家にショップやギャラリーが併設している。



展示会場③ まちや倶楽部

仲屋町にある旧造り酒屋の建物を活用し、まちづくりなどを行っている。



展示会場⑥ かわらミュージアム

瓦工場跡に建てられ、300年以上続く八幡瓦の歴史を伝える「瓦」のミュージアム。



関連イベント会場⑧ 酒遊館

1717年創業の西勝酒造が運営するスペース。

展示会場①

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA



蔵 日比野克彦の作品展示風景



1階展示室 手前から 澤田真一、日比野克彦(壁面上)、
リン・ウェイシュアン(壁面下)の作品展示風景

展示会場②

奥村邸



伊藤喜彦の作品展示風景



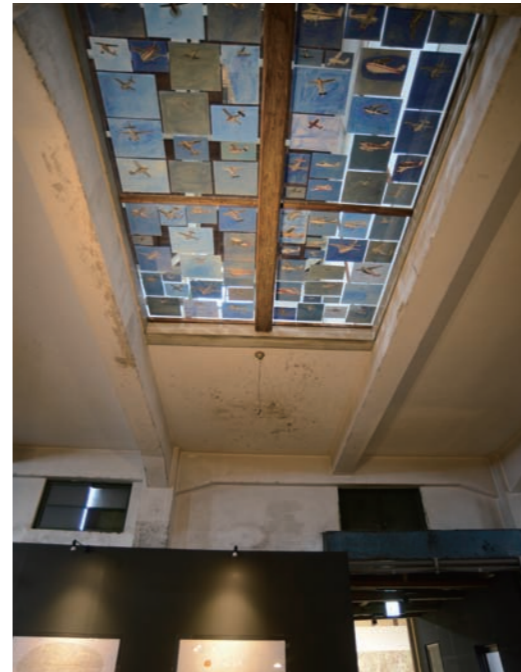
蔵 鮎万里絵の作品展示風景



左から 伊藤喜彦、吉田真理子、佐藤朱美の作品展示風景

展示会場③

まちや倶楽部



1階天井吹き抜け 西澤彰の作品展示風景



海外のアール・ブリュットポスター展示風景



左から 大江正章、藤野友衣の作品展示風景

展示会場④

旧吉田邸



河野咲子の作品展示風景



小原久美子の作品展示風景

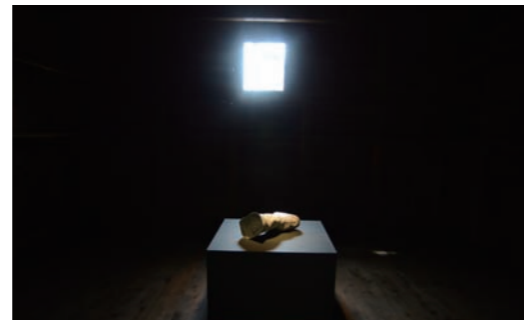
展示会場⑤
カネ吉別邸



吉田格也の作品展示風景

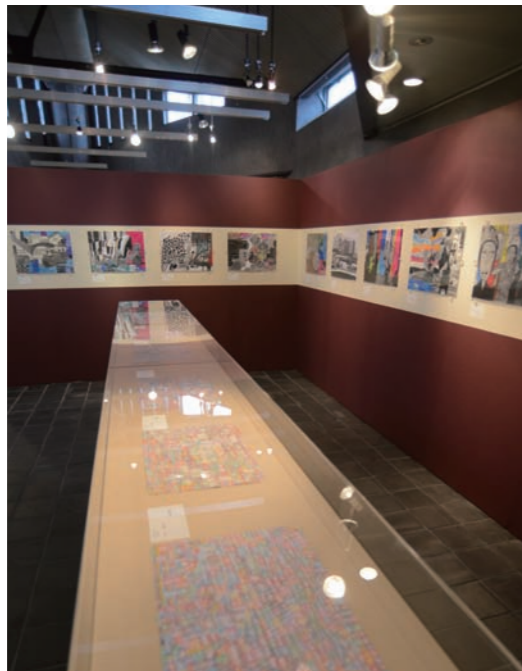


中庭 武友義樹の作品展示風景



蔵 金崎将司の作品展示風景

展示会場⑥
かわらミュージアム



手前から リン・イーリ、ワン・イェンチェンの作品展示風景



手前から ファン・チージェン、ワン・ヤオチャンの作品展示風景

ライブ러리・インフォメーション
旧八幡郵便局



八幡堀をイメージして作られた本棚
(制作:滋賀県立大学 佐々木一泰研究室)

関連イベント会場
酒遊館



マルティヌ・リュザルディの講演の様子

映像コーナー
尾賀商店



作家の創作風景が見られる映像の上映



真剣に聞き入る参加者



講師ローラン・ダンシャンに質問する参加者

INTERVIEW
パートナーインタビュー

地域の方々との共働

展示会場6カ所、映像コーナー、ライブラリ、関連イベント会場など地域との共働が実現した。
会場の管理者、商店の店主、観光物産協会の方。
展示会実現に力を貸してくださった方々にインタビューした。



宮村 勲 Isao Miyamura

まちや倶楽部代表/旧造り酒屋を改修し、まちづくりなどの場として活用している。



古久保さんの作品を展示している場所は、昨年の秋に古い機械を処分したり、壁を塗ったり3ヶ月かけて改修が完了したところ。よいタイミングでNO-MAから協力の打診をいただき、快諾しました。毎日、寒い中、遅くまで作業されて大変そうでした。会期ぎりぎりまで、どのように使っていたのか想像もできませんでしたが、見上げた時に飛行機の作品があるなど、元酒蔵の高い天井が活かされ、とても工夫が凝らされた展示に感心しました。初めての展示会でしたが、今回の展示を見た方から利用の申し込みをいただくなど新たな使い方を発見する機会になりました。

喜多 聖子 Shoko Kita

丸重商店/NO-MAご近所にある、明治時代から続く金物店。展示設営中に駆け込むと、お目当ての道具や物品が必ず見つかり助けられた。



ほとんど展示会など観に行ったことがなかったのですが、実際に作品を観て本当にびっくりしました。すごい集中力じゃないと描けないと思います。なんて表現したらいいかわからないけど、「その人の力」みたいなものを感じました。近くだからいつでも行けると思って機会を逃していたけど、観に行ったら良かった。ただ作品が並んでいるだけならこんなに感動しないでしょうが、展示の仕方がとても考えられていて作品が生きていたんだと思います。会期中、通る車のナンバーも遠方地域が多く、興味を持っている人が沢山いるんだと驚きました。

田口真太郎 Shintaro Taguchi

株式会社まっせ マネージャー/江戸時代後期の町屋 奥村邸を管理・運営するまちづくり会社で、地域に密着した事業を展開している。



企画段階からこのことを聞いていたので、実現できて感慨深いです。実際相当大変だったと思いますが、NO-MAを長年続けてきたことで信頼があったからこそ実現できたんだと思います。奥村邸はなかでも町屋らしさが残る建物なので、その空間が活かされた展示で良かったです。空間に浸って、縁側でくつろいでいる人もいました。車椅子で来られた方が、蔵座敷は段差があり入れないと諦めていたところ、地元の人(ボランティアスタッフ)の協力で車椅子を上げてもらい観ることができ泣いていた人がいたそうです。空間の良さだけでなく人の温かさを感じられる展示会だったと思います。

田中宏樹 Hiroki Tanaka

近江八幡観光物産協会事務局長/近江八幡の旧市街地の中心にある白雲館に事務局を構え、観光情報の提供や市民ギャラリーで各種催しを開催している。



近江八幡の良さを知ってもらうには町歩きが一番。今回の展示は自然な流れでほどよい散策もできて近江八幡らしい催しだったと思います。これまでもBIWAKOビエンナーレやヴォーリズ展があったので、地域の人にも馴染みやすかったと感じます。美術館のなかだけで終わらない、アートの町歩きというところが良かったです。大変なこともあるでしょうが、小さくてもいいから恒例の展示会となるよう、長く続けていってほしいですね。地域にうまく溶けこみ、肩肘はらず、誰もが気軽に観られる展示会となることで、アートの見方は柔軟になるんじゃないでしょうか。



「アール・ブリュット☆アート☆日本」展の会場と町並み